

令和7年度生徒指導サポート実践校 「特別活動の取組事例」

学校名	庄原市立庄原小学校	対象となる主な学年	全校児童
取組事例名	「季節と行事を関連させた児童会中心のイベント」		

◆ 児童の実態及び取組を通して育てたい児童像

児童の実態	取組を通して育てたい児童像
<p>諸課題件数は減少傾向にあるが、日常的なトラブルは絶えず発生している。自身の課題やトラブルを自分たちの手で解決しようと行動する実践意欲が低い児童も多く、その経験も少ない。</p> <p>一方で、〇〇したいという意欲のある児童は多く、取組に対するアイデアが豊富であり、行事等に向かう団結力、協働力は高い。</p>	<p>自分が置かれている状況を正確に理解し受け入れ、困難や課題に対して諦めることなく、挑戦し続ける児童。</p> <p>自他ともに尊重し合い、協働したり、励まし合ったりすることで、互いの成長を心から喜び合える児童。</p>

◆ 取組の具体的内容

取組を実施する意図及びねらい

1. 自分自身や所属する集団の特徴や課題を把握し、自分たちの生活は自分たちの力で改善を繰り返し、生活の質を高めていこうとする力と意欲の向上
2. 児童会が中心となって実施する成長を実感できるイベントを通して、次の活動や日々の生活に活かしていこうとする実践力の向上

取組の流れ・創意工夫・児童の変容等

<児童会執行部の発足と方針や取組の共有（事前の指導・導入）>

- 児童会執行部が掲げた公約を年度当初に確認し合い、1年間の活動の見通しを立てた。また、定期的に開催している代表委員会の場で、各学級・委員会からの意見等を吸い上げ、取組に活かすことを習慣化した。代表委員会に参加している児童らは、多様な意見やアイデアを積極的に出し、取組の実現に向けて活動している様子を見ることで、自分たちの力で学校生活をより豊かにしていこうという思いをもつことにつながった。【自己決定の場の提供】／【安全安心な風土の醸成】

<①謎解きウォークラリー>

- 入学したての1年生が友達と交流したり、校舎内を探索したりすることで、小1ギャップの解消の一つとなること、また、他学年においては、クラス替え後の新しい人間関係を構築することを目的として、校舎内数か所にクイズを設置し、ウォークラリーを行った。他学年や新しい友達に声を掛け合う様子も多く見られ、新たな絆づくりの場として、大変盛り上がった。計画、運営を行った児童会執行部にとっても、自信となり、公約達成のモチベーションを高く保つことへとつながった。【自己存在感の感受】／【共感的な人間関係の育成】

<②折り鶴教室>

- 平和について考える取組の一つとして、毎年、折り鶴を使用した作品作りに取り組んでいる。全校児童からデザインを募集し、折り鶴を1枚のボードに集約していく過程において、折り鶴の折り方を知らない児童に対して、折り方教室を開催した。折り方を知らない児童は、児童会執行部を中心とする高学年から折り方を学び、完成させていった。自然と会話や笑顔が生まれ、温かい雰囲気の中、サポートを受けた児童の達成感はもちろん、教える側の児童の思いやりの心や充実感も芽生え、目的である平和の大切さに気付かせることができた取組となった。【自己存在感の感受】／【共感的な人間関係の育成】

<③おみく神社>

- 長年の課題である「挨拶」と新年（季節）を感じさせる取組を組み合わせることで、楽しく且つ自然に挨拶習慣が身に付くことを目指し、おみく神社を児童玄関付近に設置した。おみくじには、「10人の友達と挨拶を交わしたら健康運アップ」「5人の先生とハイタッチ」等が書かれており、児童らは、進んで挨拶に取り組むことができた。挨拶の習慣化に向けて、興味・関心の高い取組となった。児童会執行部は、随時、啓発の放送を入れる等、取組を自身で振り返り、改善に活かそうとする力が身に付いてきている。【自己存在感の感受】／【自己決定の場の提供】

<児童主体のPDCAサイクル（事後の指導）>

- 児童会執行部は、各活動の前後に必ず話し合い活動を行い、取組に参加する児童の様子や声を分析し、見出した課題の解決に向けて、協議を深める等、レベルアップを実感しながら活動を続けてきた。また、取組に進んで参加する児童も増え、児童会執行部や委員会のアイデア溢れる活動の様子に憧れを抱く下級生の姿や言動も見られた。これらの様子は、中心となって運営する高学年のさらなるエネルギーとなった。また、自分たちの取組が肯定的に評価される経験を通して、自信と成長につながった。【自己決定の場の提供】



◆ 成果（○）と課題及び今後に向けて（●）

- 自身の目標達成や課題解決のために努力している児童は、93%と高い自己評価をしている。指導者の見取りは、もう少し低いのではないかと感じることもあるが、報告対象となる諸課題の減少や不登校（傾向も含む）児童が昨年度と比べ減少していることから、児童主体の楽しい取組、イベントが安全安心な風土の醸成につながっているとも捉えることができる。
- 主体的に活動することに課題のある児童も見られた。認め合える場を意図的に設定し、自己有用感を味わわせることを通して、協働的に学べる集団づくり、そこに位置付く個の能力の育成に努めていきたい。